

振興部の **知っとこ！神美**

知っておいてほしい神美を紹介します。

【三宅編Ⅱ】

三宅焼と垣添石松

三宅焼は、明治三十年頃より昭和三十四、五年頃まで、およそ八十年間続いたもので、この元祖は垣添石松である。垣添石松は中筋村加陽の西浦平三郎の次男として安政六年に生れ、長じて清冷寺の垣添家に入ったが、後には塩津の円山川の近く現在の池内鉄工所の裏側で瓦屋をしていた。

明治三十年頃、森尾の平尾源太夫氏宅に屋根ふきに行き、その際、往復の途次半坂の土に目をつけこの土は陶器をするに適していることを知り、その後三宅に移住して窯を築き工場を作り多くの人々を雇い次第に発展していった。

垣添石松は、焼物作りには大へん熱心な人で、方々に行って研究もし常に土を握って人の顔形、花びん、茶器等を考え青磁の焼物をこしらえたりした。この青磁の焼物には優れたものがあるが当時としては市場価格が少なかったなのでその後は日用品を造るに専念した。

その当時服部一三知事が勧業奨励のためこの製陶工場を視察に来られた。その当時七つの窯が造られていた。

週防、三河等に行って研究をし、こたつ、こんろ等を製造、大正六、七年頃には養蚕業が盛んになるとともに、木炭らんど(ストーブ)を製造したりした。

大正十二、三年頃、沢山のこんろを出雲に出荷したが、その代金が入らず経営困難となり工場の建物を当時の弟子職人に譲り、大阪に出て再起を図ったが思うにまかせず、後には福知山に帰りそこで昭和二年六月三日亡くなった。

垣添石松の後を継いだ者は、川戸熊蔵・赤石房吉・坪内善三郎・関岡長延・関岡石松であるが、このうち川戸熊蔵は小さい時からの弟子で直系であり、その墓地には垣添石松の墓も建てられている。前記の五名のうち現存者は関岡石松氏唯一人であり同氏は垣添石松のおいに当る人である。

関岡石松談 「豊岡民話 耳ぶくろ(昭和 50 年発行)」より

三宅の観音さん

三宅部落の中央すそに、光明山慈等寺がある。このお寺の本堂の向かって左側の御堂に観音さんが祭ってある。

この観音さんは、前の薬琳寺の本尊だと言われ、十一面千手観音で今では県の重要文化財として指定されているが、この観音さんには次のような言い伝えがある。

慈等寺は度々の火災にあっているが、多分正保年間の火災の時、寺は焼け落ちてしまった。

火が鎮まってから、人々があの観音さんはどうなったかと観音堂の近くに行くと、観音堂は焼けてしまっているのに観音さんだけはだれも持って行った訳ではないのに池の中に立っておられた。そのため観音さんの背中が煙で黒くなっているとのことである。

観音さんのまつりは七月十七日で、この日には村の者が盆踊りをするようになっていて、盆踊りをしないと火事があるとのこと今でも続いている。

大垣正幸記 「豊岡民話 耳ぶくろ(昭和 50 年発行)」より

